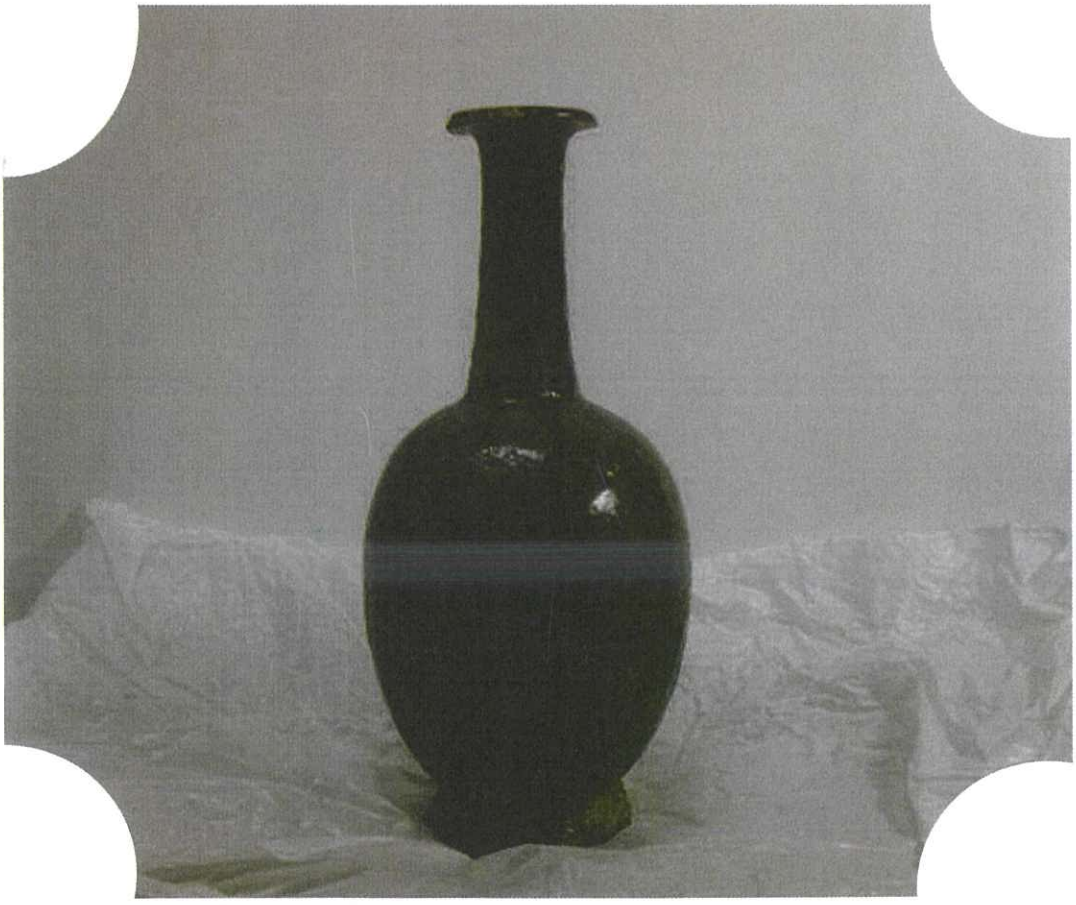
安岐の文化遺産



表紙写真説明　猿投灰釉水瓶

昭和46年阿木公民館の建設工事中に同敷地から発見されたもので、印形の胴や、つよく張った高台のつくりは奈良時代の左波理の水瓶の姿をよく写している。

（平成元年３月７日中津川市指定有形文化財）

序　文

文化遺産総合活用推進事業をうけて

文化庁の表記事業は、「各地に所在する有形無形の文化芸術資源をその価値の適切な継承にも配慮しつつ、地域振興、観光、産業振興等に活用するための取り組みを進める」と定められています。

私たちはこのことをふまえ、私たちの阿木にある多様で豊かな文化遺産をこれから阿木に住む住民の心のよりどころとして、確実に伝承していかなくてはなりません。

そのために、今回は地域住民が知ってはいても深く理解していなかったと思われる六つの事例を出来るだけ詳しくまとめました。

現在、伝統や文化を広く知らせる試みの一つに「三世代交流事業」があります。老人クラブが中心となって「小学生に阿木を知ってもらおう」という合言葉で始まったのがこの事業です。

阿木は昔から六地域にわかれていて、色々な行事を地域単位で行ってきました。毎年、地域を一つずつ回れば、六年間で阿木をすべて回ることになります。各地域の老人クラブ員を説明係として、史跡の説明･昔の遊びなどを指導しながら、親子で地域を回ります。今では阿木地域を挙げての行事となっています。

紙面の都合で、この三世代交流事業の蓄積した資料の全てを報告できませんが、今回文化庁の事業を受けたことにより、より充実した取り組みとなることを願っています。

阿木地域伝統文化継承事業実行委員会
委員長　本多　敬穂

目　次

序　文　　阿木地域伝統文化継承事業実行委員会　委員長　本多　敬穂

文化財紹介

風神神社　1
大通山長楽寺　4
大通山長楽寺蔵　木像十一面観世音菩薩立像　7
岐阜県指定天然記念物　長楽寺のイチョウ　10
阿木城　11
安岐太鼓　16

阿木･飯沼地区遺物紹介

一分団地図　17
一分団遺物　18
二分団地図　20
二分団遺物　21
三分団地図　25
三分団遺物　26
四分団地図　28
四分団遺物　29
五分団地図　32
五分団遺物　33
六分団地図　35
六分団遺物　36

あとがき

文化財紹介

- 風神神社

- 大通山長楽寺

- 大通山長楽寺蔵
  木像　十一面観世音菩薩立像

- 岐阜県指定天然記念物
  長楽寺のイチョウ

- 阿木城

- 安岐太鼓

風神神社

阿木の人里から阿木川の上流約３km の山中に、大きな岩の間から風の吹き出る穴があります。そこは入口２尺（60cm 程）余り、奥行６尺（180cm）余りの風穴です。風神神社はこの風穴を主祭神にしています。

風神神社は昔から「霊気が漂う秘神鎮まり給う」社と伝えられ、風水害を防ぐ守護神として信仰されていました。

元和４年（1618 年）大根木の長楽寺の僧慈栄が、奈良県の龍田神社の分霊「風天使」を受けて阿木川上流の洞窟に祀り社殿を建立しました。この社を長楽寺の奥の院とし、女人禁制の霊場として信仰を集めました。

８月になると二百二十日まで、参詣する信者のための祈祷が行われました。長楽寺をお参りしてから風神神社にお参りすることになっており、明治、大正、昭和の戦前までは、毎年８月になると風神詣での信者であふれ、長楽寺付近には屋台や芝居小屋ができるほどの賑わいでした。

また、奥の院では地元の人々によって女人禁制の監視を兼ねて、８月の一ヶ月間参籠奉仕が昭和 20 年代まで行われていました。

昭和 34 年の伊勢湾台風の時に、風神神社のお札を祀っていた家や田畑は台風の被害を免れたということで、尾張三河方面から参拝の人が急増（3～4 千人）しました。近年は信者の世代交代と産業構造の変化もあり、参拝者は減少傾向になっています。

なお、龍田神社からうけた分霊「風天使」は神仏二組共に長楽寺に祀られています。

祭礼日

前夜祭　　８月３０日

浦安舞、安岐太鼓等の奉納

例大祭　　８月３１日

風穴奉幣、浦安舞、安岐太鼓等の奉納

二百十日祭　９月１０日

本殿

御神体（風穴）

＜風神神社にまつわる逸話＞

（蛇にまつわる話が多く残っています）

その１

蛇淵（じゃぶち）は、風神神社の下の阿木川にあった大きな淵です。一つ目のアマゴが住んでいて、釣りをすると祟り（たたり）

があると言われていました。

また、ここで泳ぐと引き込まれて出て来られないと言われていた。現在、砂防堰堤が少し下流にできたことで、砂に埋まってしまいました。

その２

伊勢湾台風の時、風神神社の奥に仕事に行こうとした人々が山側の石垣に数百匹の蛇が固まっていたのを見ました。気持ちが悪くて道の端の方をそーっと歩いたという。どこから集まったものか分からなかったが物凄い数の蛇だったという。

その３

昭和のある時、家族で山仕事をしていると、山の上の方から笹がザワザワと倒れてきた。不思議に思って見ていると材木が転がって来たように見えた。おかしいと思い見に行くと「つとへんび」がいたという。

赤子の乳の匂いにつられて出てきたのではないかと言われています。

その４

昭和のある時、風穴の近くの平らな岩の上に大きな蛇が日向ぼっこをしていました。大きさはビール瓶より少し太く、背中にコケが生えていたという。それで写真を撮るため、カメラを持ちに家に行っている間にどこかへ行ってしまった。ツチノコではないかと思った。

この蛇には目撃者が何人かいます。

大通山長楽寺

大通山長楽寺は、阿木川の流れがいよいよ山谷を抜けて人里へと至る狭間、大根木（おおねぎ）地区内にそっと佇んでいます。

大根木とは、長楽寺が所蔵する『開基濃州長楽寺実記』は（天正 11 年＝1583 年、著者不明）に大嶺際（おおねぎわ）と記されており、山の際、つまり阿木山に一番近い集落です。

阿木川上流ののどかな暮らしは、長楽寺と共にはるか昔から今なお伝えられて来ています。また、長楽寺より阿木川をしばらくさかのぼれば、その山中に風神神社が鎮座しており、参詣の路傍には今も無数の石仏が残されています。このことからも、往年は神も仏も共に祀られ、阿木山、阿木川がもたらす大自然の中、数多の参詣者、修行者が盛んに往来していたであろうことが伺い知れます。

長楽寺の創建については、この書物によると弘仁年間（810 年～824 年：平安時代）、三諦上人（さんていしょうにん）の訪問に由来すると以下のように記されています。

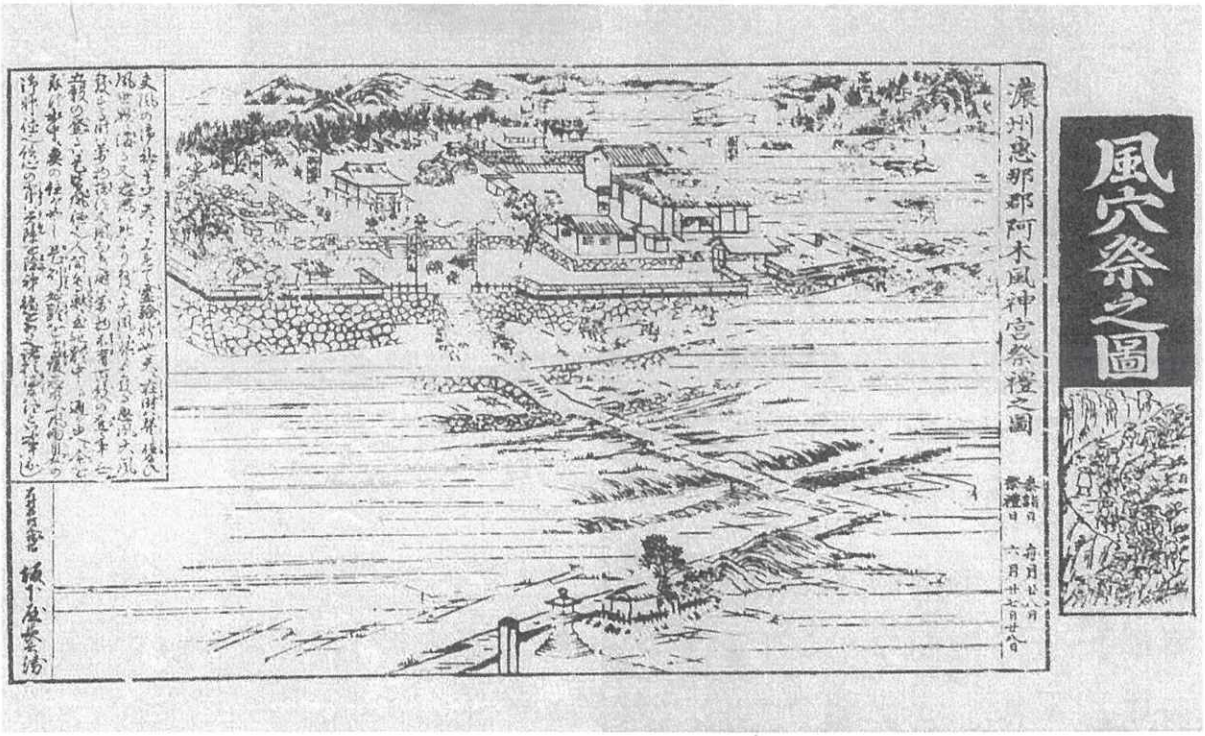
まだ大根木が山の中だった頃、旅の僧三諦上人覚祐は、ここで山仕事をしていた老人と、その老人が大切に祀っていた十一面観音像に深く感銘を受け、この地にひとつのお堂を築きました。それ以降、多くの人々の参詣を招くようになり、また、農耕や生活の知恵などを集まった人々が教え合いながら、この地が切り拓かれていったとのことです。そして、お堂もまた次々と増えていき、大（多）くの人が通うことから大通山と称し、長く楽しめるようにという願いから、長楽寺という名前が付けられました。

その後、三諦上人はこの地を離れ、今の瑞浪市にある「櫻堂薬師」を創建した後、その裏山に当たる屏風山で生涯を終えたのでした。

時は進み、動乱の戦国時代までの長楽寺は、十二間四方の中堂（一間は約 1.8m）、六間四方の法華堂、五間四方の釈迦堂、三間四方の薬師堂、現在の本堂の元となる護摩堂、四間半四方の鐘楼堂、多宝塔を備えた七堂伽藍と、属坊（お寺に関わる僧侶たちの住居）が梅本坊、中野坊、一輪坊、大威坊、東古坊、左大坊、観右坊、歓喜坊、高下坊、法学坊、等覚坊、立徳坊と十二を数えるほどの賑わいでした。しかし岩村城を焦点とする織田軍、武田軍の戦乱の中、本尊以外の全てを焼失してしまいました。また、この折に武田軍が持ち去った梵鐘が、先の大戦の際に供出されるまで、飯田市の長石寺に保管されていたとのことでした。

なお、長楽寺が武田勝頼軍によって焼かれたのと同時期に根の上にあった龍泉寺も武田軍によって焼失しました。

その後、江戸幕府が開府してからは、時の住職真海法印（しんかい



ほういん）による再建が岩村藩の庇護のもとに行われ、さらに真海法印は風神神社の創建にも関わったことが、残された板碑によっても知ることができます。また、二枚の参詣絵図により、境内から参道に至るまで、往年の賑わいを取り戻していた様子が伝えられています。

その長楽寺も明治維新以降は、わずかな堂宇を残すのみとなってしまったものの、昭和 49 年、二宮三郎氏の大寄進がもととなって、多

くの阿木内外の方々の篤志を集め、本堂改築、本尊、三十三観音像の修復、境内の整備等がなされ、落慶御開帳法要もかない、現在に至っています。

今、創建以来の本尊十一面観世音菩薩と共に、本堂内には多くの仏像神像がお祀りされており、今なお静謐な信仰を集めています。

また、境内には樹齢1100年と伝えられる大いちょうが枝葉を拡げ、本堂の静寂とは対極するが如く、満ちる生命の勢い、力強さを感じ得ることができます。

風天使

大通山長楽寺

【住所】中津川市阿木５８６５番地

【開創】弘仁年間（810年から824年：平安時代）

【本尊】木像十一面観音立像（秘仏）

像高：約1.0m

【その他諸尊】

風神（風天尊）像・三十三観音像・七福神像・など（全て推定江戸時代）

【堂宇】本堂、太神宮神社（通称：六社様）、祖霊堂、白山弁財天堂、龍神社、再建稲荷明神社、役行者石像、庚申塔など

※本堂は平素は施錠しておりますが、毎月第三日曜日の午前中には奉拝日として、中へ入ることができます。

～参考資料～

「開基濃州長楽寺実記」天正 11 年(1583 年)長楽寺所蔵
「奉建立風神社板碑」元和 4 年(1618 年)長楽寺所蔵
「歴代年数等書上帳」文政 12 年（1829 年）長楽寺所蔵
「大円寺村 福泉坊文書」2007 年 恵那市教育委員会
「巖邑府誌」1978 年 岩村町教育委員会編
＝ 監修　隣家・森井龍男翁（大正 12 年生）＝

大通山長楽寺蔵
木像 十一面観世音菩薩立像

大通山長楽寺所蔵の木像十一面観音立像(中津川市指定文化財)は、長楽寺の寺伝『開基濃州長楽寺実記』によると、平安時代の長楽寺創建以来伝わる唯一の尊像として長楽寺に祀られています。現在秘仏とされているその姿は昭和 49 年の修復の際に記録された写真で拝することができ、像高約 1.0mの木像、左手には蓮の花を持っていたであろう持華（じげ）の印相、右手は静かに、触地（そくち）の印相の如く地に向かい、ふくよかな指先が更にその先へと伸びています。また顔立ちも豊かであり、全体に丸みを帯びたその様相は、まるで慈愛に満ち足りた穏やかな稚児のようです。

本像が当寺に祀られることとなった経緯は、まず長楽寺開創の僧三諦（さんてい）上人が、旅の途中にこの地を訪れた折、ここに住む老人が本像を大切に祀っていたというところから始まります。

また、寺伝（寺の言い伝え）にはその作は奈良時代、民衆のための仏教を説き歩いた僧、行基（ぎょうき）によるとも伝えています。

長楽寺創建の発端となった本像は、その後長楽寺を七堂伽藍、属坊十二坊という規模にまで発展させたのですが、戦国時代の戦禍によって、長楽寺は本尊とわずかな堂宇以外焼失してしまいました。そして、その戦禍の様子を、寺伝（言い伝え）は、次のように伝えています。

岩村城の役人で長楽寺を担当していた官沢箭助（かんざわせんすけ）という人がおり、村内の見沢（みざわ）という所に陣屋のような屋敷を構えておりました。時は永禄年中（1558年～1570年）、甲斐の武田晴信入道信玄の軍勢が、京の都に向かう途中、いよいよこの美濃の国、阿木村にも攻めてきたのでした。官沢家もたちどころに攻め取られ、その家を仮の陣屋として構えた武田軍の使者が、長楽寺にも田畑を武田軍に提供するようにと伝えに来ました。

時の住職、常高（じょうこう）和尚は、「それを聞き入れる事は難しい。ここは代々長楽寺、ご本尊のおかげで切り開かれた領地。どうかお慈悲を。この寺領をこのままにしておいて頂きたい。」と、その思いを伝え、使者を返しました。長楽寺の皆は、このままでは武田の軍勢が攻めて来るであろうと話し合い、防ぐ準備を整えました。

そしてその夜。いっこうに何事も起こらないので、寺の皆はそろそろ油断をし始めた頃の丑の刻（午前二時頃）、突如攻め来た敵の軍勢はあまりにも多勢。諸堂を始め各坊のことごとくに火をつけ始めました。寺の皆は山手に登って集まり、なんとかこれを防ごうと抵抗するも防ぎきれず、寺々は大きく燃え上がっていく有様。ついには逃げ去って行く寺の者たちも出始めたのでした。

しかしその時、突然の雷雨。敵味方驚き乱れる隙をぬって、常高和尚はその稲光を頼りに敵の中に分け入って、ひたすら中堂へと走り至り、激しい炎をも恐れず堂内に入って、本尊十一面観世音菩薩を見事に担ぎ出したのでした。そして、和尚に付き添っていた味方の兵士、

中島利八郎忠義は、常高より本尊を託され大川（阿木川）の方へと逃げ走り、ひとまず本尊を石の上に置き、合掌の後、この混乱から本尊を守る思いの末、川へと投げ入れたのでした。

しかし、濁流に呑まれたはずの本尊、不思議なことに水際にて川の水を切るが如く、上流へとさかのぼって行く。その様子を見た敵の軍勢は皆、驚き恐れ、ついに逃げ去って行ったのでした。その後、この報告を受けた敵方の軍師は、長楽寺をそのままに退却を決め、生き残った利八郎は上流にて本尊を取り戻しました。

その後、武田信玄の跡目を継いだ武田勝頼が、再び岩村城に攻め至り、長楽寺もまた、先の戦にて焼け残った法華堂に火を放たれてしまいました。しかしこの時もまた、たちまち空には黒い雨雲が立ち込めて稲光、どしゃ降りの雨。敵方の軍勢が散り乱れる中、時の住職梅本坊正栄（しょうえい）和尚は本尊を無事に運び出し、一切の堂宇は焼け払われてしまったものの、本尊十一面観音像は再び戦禍をくぐり抜けました。

現在この本像は土地のいわれに従って秘仏とされ、その容姿を拝することはかないませんが、長楽寺の境内や、穏やかな近隣の山河の景色から、往時を偲ぶことが出来るのではないでしょうか。

なお、武田軍が長楽寺を攻めたさい、地域に住んでいた人々は木戸ヶ入の上流にある岩穴に隠れました。その場所は「隠れ小屋」と呼ばれています。

岐阜県指定天然記念物
長楽寺のイチョウ

阿木長楽寺大いちょうの樹齢はおよそ１１００年と伝えられています。いちょうといえば、古来より葉は薬用に用いられ、種子はギンナンと呼ばれ、食用として愛されています。

また、いちょうの木には雄木と雌木がありますが、阿木長楽寺の大いちょうは雄木であり、ギンナンの実を付けることはありません。この巨樹の特徴は、幹周（地上１３０㎝における太さ）は８ｍ４０㎝、地上約３ｍところで幹が四本に分かれ、その太い所では周囲が４ｍもあります。また、木の高さは２０ｍを超えており、昭和４２年に岐阜県の天然記念物に指定されました。

＜大いちょうにまつわるものがたり＞

この大いちょうの木には二つの大きな焦げ跡があったと言われております。そのひとつ目は、今から約４５０年前のこと、甲斐の武田軍が阿木に侵攻した際に寺を焼き討ったため、その時の大火にて付けられたという焦げ跡です。

そして、もう一つは今から約２５０年前の江戸時代。当寺の前を流れる阿木川に架けられていた橋が、大雨で増水した濁流によって流失してしまった時のことです。橋を失った近隣の住民たちが新たな橋の橋桁用材としてこの木を使わねばならなくなり、およそ地

上３メートルの所から先を切り倒し、その切口を保護するために炭火を焚いて焦がした・・・と、今日まで言い伝えられています。

今・未来

このように、幾多の災禍や風雪に耐え、地域の歴史を静かに見つめてきた大いちょうの木は、恋人同士や、夫婦が共に手をつないでいちょうの木に触れることで、夫婦円満、子宝授与、家内安全にご利益があると信仰されております。

こうして、はるか昔からこの場所で、この土地の歴史、人々を見守り続けている大いちょうを、地域の大切な文化財として後世に伝えるため、地域の住民の方々が主体となって、保全・ＰＲに取組んでいます。

阿木城

阿木城は中津川市阿木に残る、戦国時代（中世末期）に造られたとみられる山城跡です。規模が大きくて保存状態もよく、築かれた当時の姿をまるごと残しており、2002（平成 14）年に中津川市指定文化財に指定されました。この城が築かれたと考えられる時代は、今からおよそ 450 年前です。天下統一をめざす織田信長と武田信玄、その子勝頼は、中津川市や恵那市等現在の岐阜県東部をめぐって戦い・にらみ合いを続けました。

戦いにあたり、織田軍・武田軍はいくつもの城を築きましたが、阿木城もそのどちらかの勢力、あるいはどちらかに味方した勢力によって築かれたと考えられます。

＜阿木城の特徴＞

◎土を盛り、掘ることで築かれた城です。天守閣や高い石垣が築かれる以前の姿をとどめます。守りやすく、敵を撃退しやすい造りとなっています。

◎作り直した跡が見当たりません。このことは、計画的に、一気に今見る姿ができ上がっていることを示しています。また短い期間しか使われなかったと考えることもできます。長篠の戦いで織田軍に大敗した武田軍は、やがて岐阜県側の拠点であった岩村城も奪われ、信濃（長野県）さらには甲斐（山梨県）へと退却を重ねました。戦乱が終息するとともに、阿木城はその役割を終えたと考えられます。

◎主郭（近世の城でいう本丸）の占める面積が、近隣の城と比べて格段に大きいことがあげられます。これは内部にたくさんの人が入ることができるし、複数の建物を建てることもできます。この城に何か特別の役割があったことをうかがわせます。

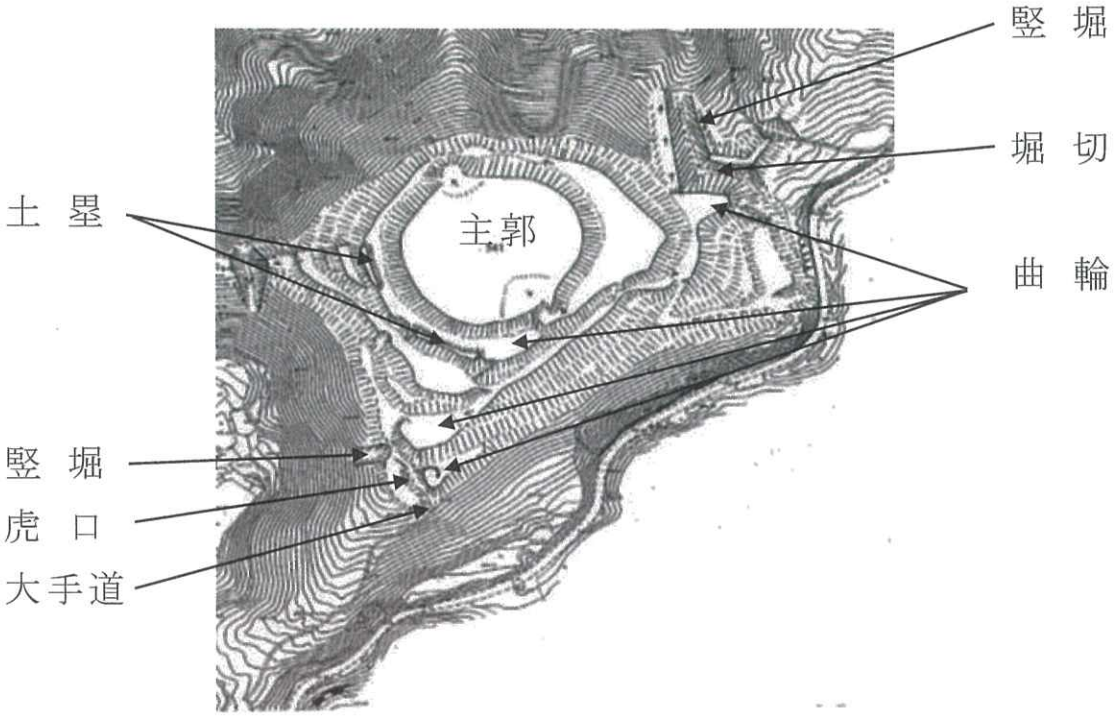
◎残り具合がとても良い。建物は残っていませんが、堀や土手がほとんど築かれた当時のまま残されています。

＜遺構＞

それでは「縄張り図」の**大手道**と示した道から阿木城をみてみましょう。ここから本丸に向かっていくのが大手道であり、当時のメインルートです。

大手道の始まりの位置にあるのは、**虎口**（こぐち）と呼ばれる出入り口です。ここには門（大手門）があったと思われます。敵が攻めてきたら扉を締め切り、入ってこないようにしました。

＝「阿木城の縄張り図」＝（髙田徹氏作図に記入）



虎口の両側は**切岸**（きりぎし、人工的に作った急斜面）で、その上部は**曲輪**（くるわ）と呼ばれる平坦な場所になっています。切岸は敵がよじ登ることを防ぐ役目があります。曲輪の上には兵が立ち、虎口に迫った敵に弓矢や鉄砲、あるいは石を投げつけます。

その次に**竪堀**（たてぼり）があります。竪堀は山の斜面に向かって縦に延ばした堀のことです。敵が斜面を移動することを防いでいました。竪堀と大手道の接する場所は道幅が狭くなっていて、多くの敵が一気に城内に侵入できないようになっています。

その先はいくつかの**曲輪**があり、敵兵に対して正面あるいは左右から攻撃を加えられるようになっています。

土塁（どるい）のある曲輪があります。土塁は土を盛って堤防のようにした施設です。敵兵の侵入を防いだり、内側が見通されるのを防いだりする役割をもっています。今は同じ曲輪に二か所に分かれていますが、もとは一続きだったと思われます。

さらに進むと、搦め手（からめて）といわれる城の裏側になります。搦め手方向は尾根が続くため、敵兵にとっては攻め込みやすいい場所、つまり、守る側としては最大の弱点となります。そのため搦め手を守る**曲輪**は主郭に次ぐ広い面積をもっており、その重要性

が知られます。

搦め手の弱点を補うため、山続きの尾根を断ち切った**堀切**（ほりきり）と呼ばれる堀が作られています。この堀切は阿木城では最も深くて長く、実にしっかりした造りになっています。

堀切の先端は、**竪堀**になって斜面に長く延びています。

さらに竪堀の内側には、先に述べた主郭に次ぐ規模の曲輪が設けられ、堀切や竪堀と一体となって敵兵を撃退する構えをとっています。

いよいよ**主郭**です。東西南北とも約 50mのほぼ円形で、周囲は約5mの切岸で囲まれています。主郭の南北に対称的に**虎口**があり、その造りもほぼ同じです。

＜阿木城の役割＞

雑誌「戦国の城を攻める！」（洋泉社）の中に「岩村城攻め」と題した論文が載っています。筆者の三宅唯美氏はこの中で、阿木城は織田信長軍が岩村城を兵糧攻めにするための包囲網の一つとの、新しい見解を発表してみえます。阿木城に関する部分を、次に要約して引用します。

「天正 3 年（1575 年＝引用者）、信長は長篠の合戦に勝利するとただちに信忠に岩村城攻略を命じた。信忠は水晶山に陣を構えた。岩村城から周囲に延びる街道沿いには阿木城、信の城、山田城、下向手城、漆原城、前田砦、小田子砦など小規模だが特徴的な縄張りを持つ城跡が見られる。城山をびっしり包囲したのではなく、こうした城によって領内の交通を遮断し、兵糧攻めにしたのである」

＜庶民の苦しみ＞

織田軍と武田軍がいくつもの城をこの地に築いて戦った当時、城造りに狩り出された庶民の思いが歌詞になって残っていました。恵那市立東野小学校の先生方がお作りになった「私たちの郷土、東野の昔と今」という郷土読本の中に納めてあります。地元のお年寄りを回って

聞き取りを行い、歌も歌ってもらったとのことです。
郷土読本は以下の通りです。

岩村城も東野も織田軍が奪い返し、遠山の庄は織田氏の土地になってしまいました。この天正元年（1573年＝引用者）から三年間は東野にとってたいへんなときだったのです。
このときの様子を次の歌から考えてください。

◎　しみどうで（染戸）
　きょうもほりほる　音きけば
　ほりをほりほり　　ほねをぽりぽり
◎　じごくにて
　おにがほねかむ　　音きけば
　きょうもほりほり　あすもほりほり

東野では染戸地区に城跡があります。東野ばかりでなく阿木や周辺の庶民にとっても、当時は地獄の日々だったことが伝わってきます。

＜参考文献＞
「岐阜県中世城館跡総合調査報告書」（岐阜県教育委員会発行、2004年）
「阿木城の縄張りについて」（髙田徹著、2005年）
リーフレット「阿木城」（髙田徹監修、阿木城跡保存会発行、2016年）
「戦国の城を攻める！」（洋泉社、2014年発行）のうち「岩村城攻め」（三宅唯美著）
「私たちの郷土、東野の昔と今」（恵那市立東野小学校発行，1969年）

＝髙田徹氏のご厚意により、監修いただくとともに、縄張り図使用のご許可をいただきました ＝

安岐太鼓

安岐太鼓は、風神神社の神楽として行われる奉納太鼓です。

恵那地方に伝えられている民族芸能の音楽のほとんどが、伝統音楽が完成された江戸中期以降に伝えられました。

安岐太鼓の打ち方は、お諏訪太鼓の流れを汲み複式複打法を用いた一つです。

太鼓は古来より神事や祭礼において奉納したり、伝達手段としての役割がありました。

立春から数えて二百十日目は、台風が起こりやすいとして、風神神社ではこの日を例祭としていますが、安岐太鼓は毎年「二百十日打ち」を奉納します。

風神神社の風窟からは一年中風が吹き出ており、ここに風の神が住んでいると言われています。安岐太鼓は、風の神様を喜ばせ、風雨を鎮め、五穀豊穣を願う太鼓として活動しています。

現在の安岐太鼓は、昭和44年当時風神神社の宮司であった鷹見重一さんのご尽力と青年団により安岐太鼓保存会が発足したことに始まります。

町内の行事や祭典に出演したり、各地で行われる太鼓フェスティバルに参加するなどの活動を行い、後継者の育成にも力を注ぎ、小・中学校の太鼓クラブの指導にあたっています。

風神神社奉納太鼓

敬老会太鼓披露（中学生）

阿木・飯沼地区
遺物紹介

・一分団

・二分団

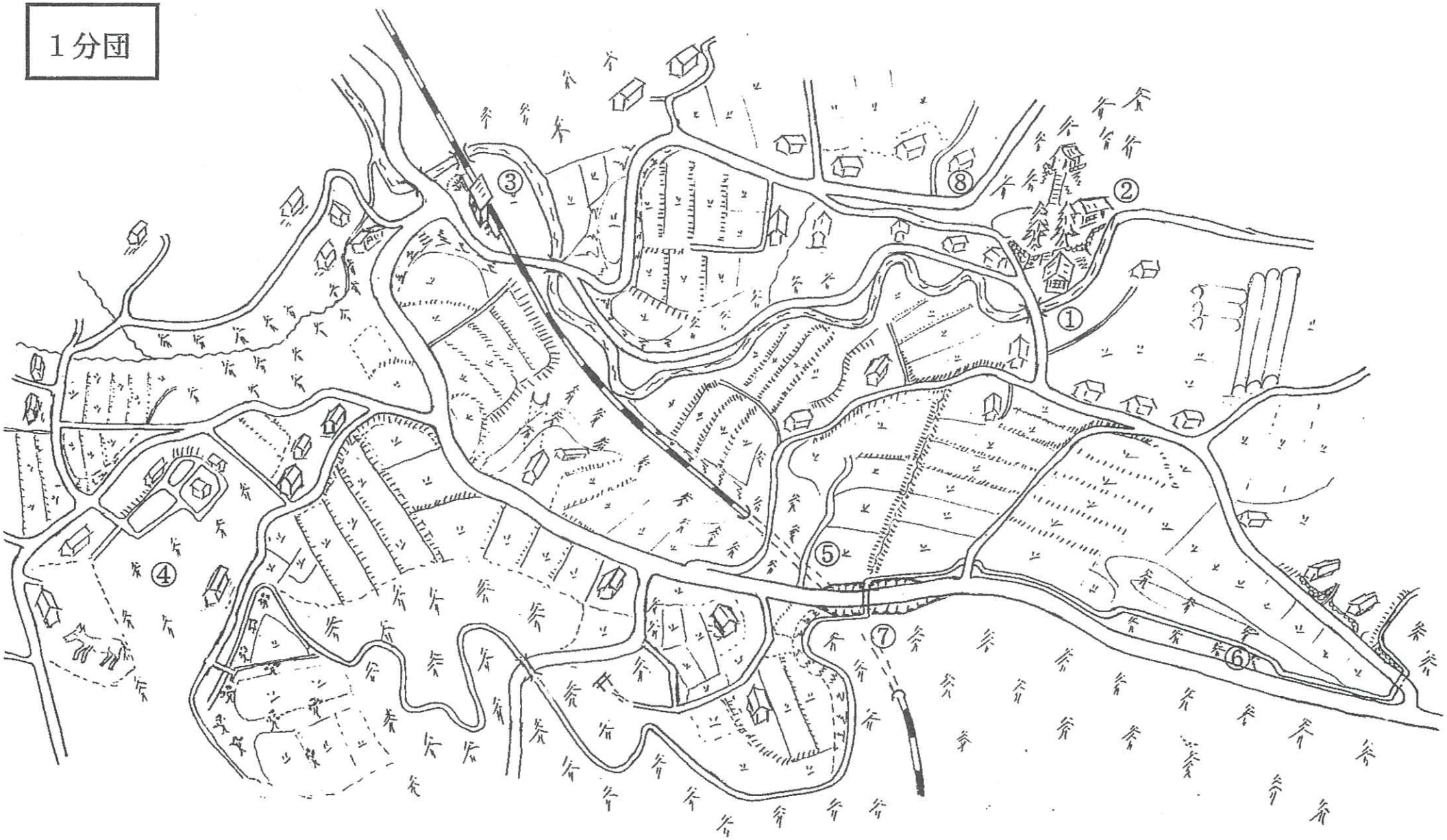
・三分団

・四分団

・五分団

・六分団

1分団



【1分団】

1 子安観音

「安産・子授けにご利益あり」といわれ、創建は明らかではありませんが、「おこやっさん」と呼ばれ毎月18日には月並祭が

営まれています。境内には夫婦杉があり、高さ40m、幹周り 4～4.5mあり、市の天然記念物になっています。

2 神明神社

飯沼村の産土神で創建が1347年、再建は明暦２年（1656年）です。飯沼出身で北海道の開拓に行った人々が飯沼をなつかしんで、大正13年に第一鳥居を寄贈しました。

3 明知鉄道飯沼駅

平成３年(1991年)に作られました。明知鉄道の中では新しい駅です。普通、駅は平らな所に作られますが、飯沼駅には日本で最も傾斜（勾配）が急なプラットホームがあります。試しにカンカンをころがしてみましょう。

4 狐塚古墳

横穴式石室という石の部屋をもった古墳です。今からおよそ1,300年位前のもので、７つの古墳があります。阿木には 36の古墳が確認されています。1967年に発掘調査が行われ、中津川市史上巻にくわしく記されています。

5 明知鉄道飯沼トンネル

この付近は湧き水が多く、掘るのに大変苦労して、昭和８年(1933年)に大井～阿木間が開通しました。コンクリートブロックを入口近くの田で作り、ブロックを大きな円に組み立てて掘られました。トンネルの内側には所々に筋が入っていますが、これは上からの圧力を抜くための工法です。トンネルの下部には石を敷きつめて、水を出すようにしてあります。

6 血取り場の馬頭観音

血取り場とは昔、馬の病気を治すために足から血をとった所です。

軍馬（戦争に行く馬）の安全を願った馬頭観音が祭られています。このうち瓦で作られた馬頭観音は大変珍しいものです。

7 飯野水路

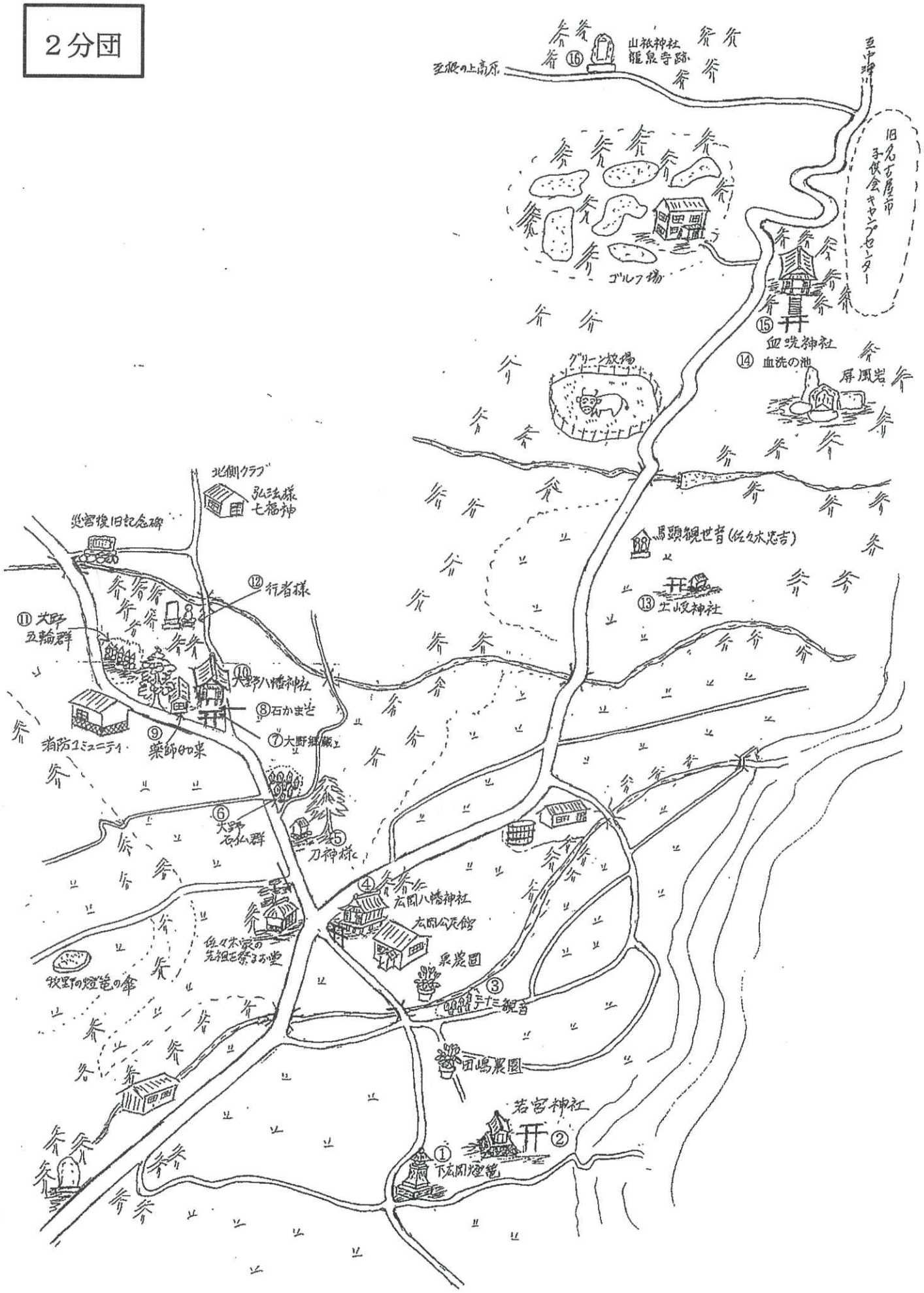
保古ノ湖を設計された可知貫一博士の最後の仕事といわれる「飯野の堤（ため池）」から水を引いています。この水路は戦後の食料増産と飯野の開拓のために作られました。

8 小栗千代吉さんの墓

小栗千代吉さんは、明治以降、日清戦争における阿木で最初の戦死者です。村では盛大な村葬が行なわれました。明治政府は戦争に国民を協力させるため、戦死者を手厚く葬りました。

小栗さんを初めとして、阿木では２１２名の方々が戦争で亡くなられました。

2分団


⑯ 山祇神社
龍泉寺跡
五箇の上高原
五中跡
旧名古屋市
子供会キャンプセンター
ゴルフ場
⑮ 血洗神社
⑭ 血洗の池
屏風岩
グリーン放場
北側クラブ
弘法様
七福神
災害復旧記念碑
馬頭観世音(佐々木忠吉)
⑬ 土岐神社
⑫ 行者様
⑪ 大野五輪群
⑩ 大野八幡神社
⑧ 石かまど
⑦ 大野地蔵
⑨ 薬師如来
消防コミュニティ
⑥ 大野石仏群
⑤ 刀神様
④ 右関八幡神社
右関公民館
佐々木家の先祖を祭るお堂
泉農園
牧野の燈籠の傘
③ 子たち観音
団嶋農園
若宮神社
②
① 下右関燈籠

【2分団】

1 下広岡灯篭

江戸時代の安政６年（1859年）に、風神神社の道しるべとしてたてられ、灯篭の正面には風神常夜燈、右側には恵那大権現、左側に稲荷大明神とほられています。

2 若宮神社

創建は、1765 年で昔の記録には熊野神社と書かれていましたが、その後お祀りしてある神様が仁徳天皇であることがわかり、若宮神社と呼ばれるようになりました。

3 六地蔵（三十三観音）

西国三十三観音巡りといって、西国にある 33箇所のお寺を回り、お参りする風習がありますが、西国は遠いので、わざわざ西国まで出かけなくてもお参り出来るようにと作られたのがこれらの石仏です。阿木には黒田、飯沼、野田にもあります。また寛延３年(1750年)に作られた６体のお地蔵様が一緒に安置されており、この地域の六地蔵という地名の由来となっています。

4 広岡八幡神社

広岡村の鎮守様（土地の守り神）として大野八幡神社から譽田別命（応神天皇）を分霊（神様の分身を持ってくること）したのが始まりで、創建は 1758年で、ここを通称「新森」と呼んでいます。

5 刀神様

大野の西尾家の祖先（佐次右衛門）が恵那神社の神官をしていたときのことです。当時、恵那神社のご神刀を家で預っていましたが、その刀を泥棒に盗まれてしまいました。それから災難が立て続けて起きたので、神様の怒りを鎮めるため、社を立て木刀を供えたのが始まりです。

木刀を供えると歯痛が治るとも言われています。

6 大野の石仏群

言い伝えでは、かつて桑原山大仙寺といわれる天台宗のお寺があったといい、一説では大野石仏群は大仙寺がここに建っていたことを証明するものではないかといわれています。ここにある三面馬頭観音は大変珍しい地蔵です。

7 大野郷蔵

江戸時代、村々に設置された共同の倉庫を郷蔵（郷倉）といい、年貢米の一時的な保管倉庫でした。

更には、村全体の備蓄米の貯蔵庫としても利用されました。（右端の灯篭には、安政４年＝1858年の年号あり）

8 石かまど

大野八幡神社の境内にあるこのかまどは、神社のお湯立て用です。６つも並んでいるのはかなり珍しいものです。

湯立てというのは、お祭りの時かまどで湯をわかし、神官が笹の葉を湯にひたして参拝者にふりかける儀式のことです。阿木の各地域では、秋の祭りを「おいだて」といいますがこの湯立てがなまったものです。

9 大野の薬師如来像

言い伝えではかつてあった大仙寺には弘法様と七福神と薬師如来がまつられていました。その薬師如来は大野組集会所にうつされ現在もまつられています。薬師如来とは、病気を治し長寿を授ける力を持つ仏様です。

10 大野八幡神社

この神社は阿木で一番古い神社の阿気明神ではないかといわれています。創建は1469年で、元亀２年（1571年）の大雨で山津波がおき、神社が建物ごと流されてしまい、その後元亀３年に建てなおされました。

ここには誉田別命（応神天皇）のほか、神明神社や金刀比羅神社など８つの神様が祀られています。

11 大野五輪塔群

明治中期ごろに、大野の伊藤源助さんが自分の土地に在ったものを一個所に集めたものといわれています。

五輪塔とは供養塔であり、上から順番に空・風・火・水・地の５つのパーツでできています。これは宇宙が空・風・火・水・大地の５つの物から成り立ってるという考えにもとづいたものです。

12 行者様

行者様とは修行をつんだ修験者のことです。祈祷（お祈りのこと）や占いを得意としていましたが、ほかにも医療や農業などの知識も持っていたので、尊敬されました。

ここには２体の石仏があり、１体は役行者、もう１体は実利行者（中津川市坂下の人）です。広岡には、ここ大野地区と牧野地区の２箇所に行者様がまつられています。

13 土岐明神

土岐氏が斉藤道山に攻められ落城した際に、土岐右衛門頼常が乱軍の中を切り抜け、「この山中こそ善き隠れ家なり」と一門の首を火葬し、骨壷を土中に納め、その後、この土地（阿木）に住み着きました。土岐右衛門もこの世を去り、一族の墳墓に埋葬され、その墳墓が土岐明神と伝えられています。

この周辺の土地を「右衛門平」と呼び、土岐神様の後の山は土岐ヶ峰と呼ばれています。

14 血洗の池

国道３６３号沿いに石碑が建っています。

天照大神誕生の折、この池で体を洗い清められ、胞衣（へその緒）は恵那山に納められたと伝えられています。ここから恵那山と名付けられたという伝説があります。大きな池でしたが、いく度もの山津波で埋まってしまいました。

15 血洗神社

天照大神の誕生のさい、体を洗い清められたといわれる血洗の池に関わる神社です。恵那神社と関係が深く、釜沢、湯船沢、三森山など、近隣には天照大神誕生に関するいくつかの伝説の地があります。

16 龍泉寺の跡

1574年、織田・武田軍の両軍がこの地方をめぐって争ったさい武田勝頼に攻められ焼かれた寺院です。

この時、大根木の長楽寺も焼かれました。

攻められた時、お寺の鐘を井戸に放りこんだという話が残っています。

3分団

【3分団】

1 真原の熊野神社と神明神社

二つの神社は昔は別の場所にありましたが、熊野神社は天和元年(1681年)に真原倶楽部の付近にあったものを移転しました。向かって左が神明神社、右が熊野神社です。

神明神社は寛永2年3月(1625年)、熊野神社は元和8年2月(1622年)に建立されたと棟札に記録されています。

2 風神神社常夜燈

風神神社の参道に置かれた石の常夜燈で、電灯のない時代に街路灯の役割をしました。

風神は昔は女性が山にはいると山の神がお怒りになり災いをもたらすと言われて女人禁制の地でしたが、昭和20年代以降は女性もお参りがでるようになりました。

3 薬師如来石仏

真原熊野神社のはずれに道路に背を向けた薬師如来石仏があります。薬師如来は病苦から人々を救う仏様です。

もともとは真原倶楽部の場所にありましたが、熊野神社が今の場所に移転されたとき、一緒に移されて今の場所に安置されました。石仏の向いている方向の山頂には秋葉神社があり、険しい山中にあるため参拝にいけない人がお参りする為にこちらに安置されたとも言われます。

4 真原念仏堂

江戸時代には大勢の人が集まると一揆などの相談をするのではないかと、領主や幕府は集会を禁止していました。

しかし信仰なら許されるため、各地域毎に念仏堂などを建て、地域の人が集まっては念仏を唱えたり寄り合いをしたりしていました。

今でもその名残で集会所に阿弥陀様など祭っている所があります。

5　明治用水　（殿様井水）

阿木川上流の一の沢から山野田まで伸びている用水で、明治維新の頃、岩村の殿様が藩のお金を使って造りました。その時間違えて掘った水路跡が山野田・真原に残っています。

当時は殿様井水といわれていましたが、明治時代、水路が傷んで修理をする時に水路に名前を付けなさいと言う県の命令で、明治用水と名前を変えました。

また、右奥に見えるのは簡易水道の配水池です。

ここからは見晴らしがよく、阿木の里は高低差の大きい急な地形であることがよく分かります。

6　井戸川用水（下ゆ・真原山野田用水）

真原地区を流れるこの用水は生活用水として使われ、汚れた水などを流さないよう排水について厳しい約束が守られていました。

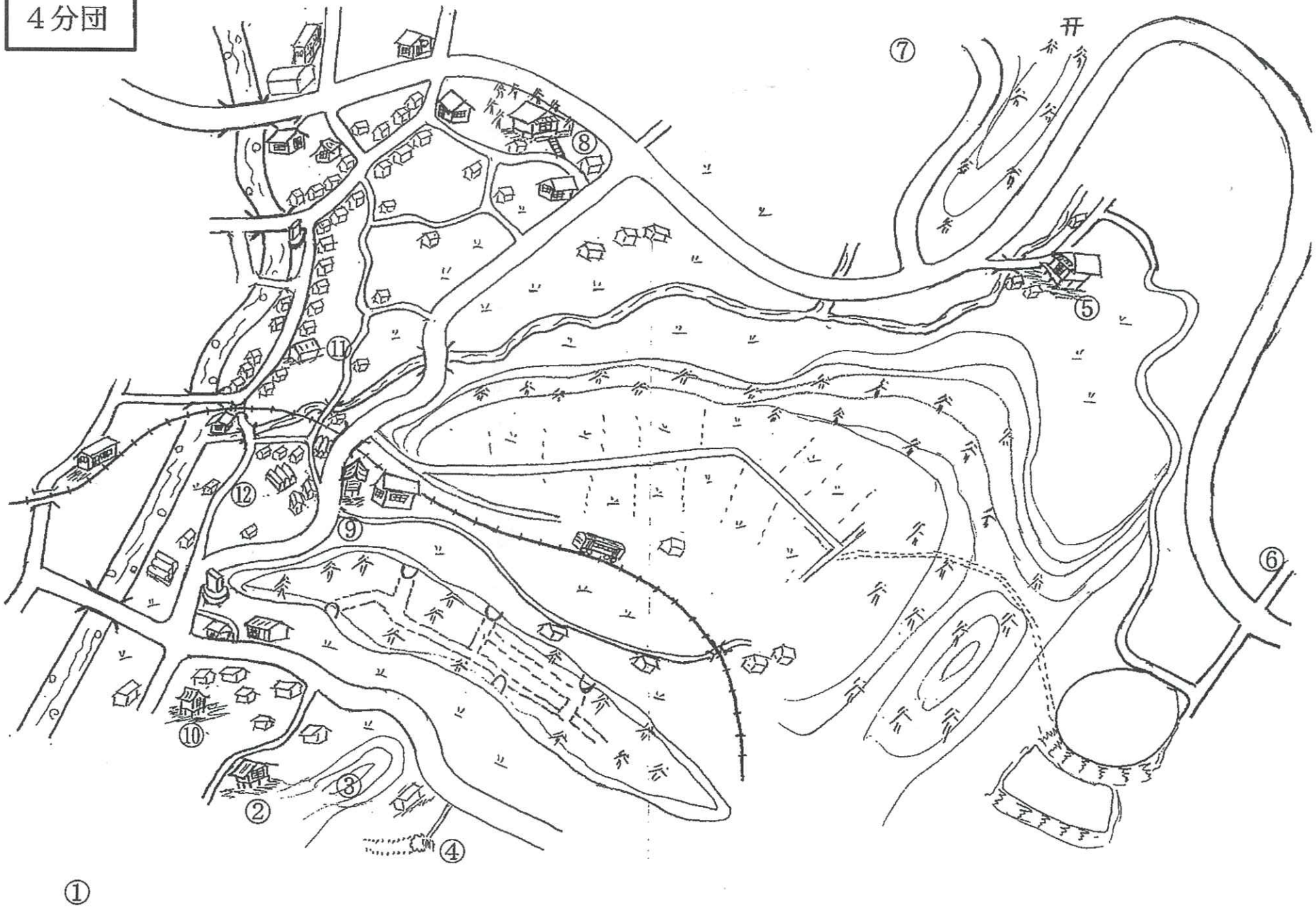
この用水は農業用にも使われ、真原・山野田で水の分配について長い間話し合いが行われたのち、真原７、山野田３の割合で話し合いが付き、水路には７：３に分配するよう鉄板がはめ込まれています。

7　浅間神社の水神碑

昔、水は非常に貴重で、人々は水を確保するために用水路を整備しましたが、その水路の水の分け方をめぐって山野田と真原との間で水争いが起こりました。その争いが解決した記念として水神碑が神社の下に祀ってあります。

明治十四年ヨリ冬季用水定
幹　今井新左エ門
旋　安藤利左エ門
者　鈴木徳次郎
明治三十二年四月建之
山野田組

4分団



【4分団】

1 八屋砥の無縫塔と法印様の墓

地元では水神と呼ばれています。右は法印様の墓。法印とは位の高いお坊様で、岩村のお殿様から罰を受けて阿層田へ来て住んだといわれています。

2 津島神社

お天王さまと呼ばれ八屋砥組の産土神です。元禄３年（1690年）愛知県津島市にある天王大社より分霊を迎えました。

祭神は素佐之男命であり、夏の病を治し、稲作の病害虫駆除を願う神です。

※産土神：生まれた土地を守る神

3 八屋砥古墳群

八屋砥の通称・中根に古墳が７基あります。どれも直径１０ｍくらいの円墳です。つくられた時代は調査がなされていないのではっきりしませんが、今から１３００年位前ではないかと思われます。

4 鍾乳洞

八屋砥鍾乳洞は奥行き49m以上、高さ0.3～0.4m、中津川市の文化財に指定され、東濃地方では唯一の鍾乳洞です。

1400万年～1800万年前、このあたり一帯は海底でした。この時代に海の流れによって集まった貝殻がその後長い年月をかけて石灰岩となり鍾乳洞となりました。阿木では化石の入ったサバと呼ばれる地層が見られますが、これも同じ時代に砂や泥が　　堆積してできたものです。

5 塞神神社（妻神）

天文7年（1538年）に創建、関が原の合戦のさいに焼かれ、寛永17年（1640年）岩村城主により再建されたと言われています。

「妻神」という社名板が掲げられており、子が授かる、恋しい人と結ばれるなどのご利益があると伝えられます。また昭和の時代まではわらじやわらぞうりが供えられていたことから、災難に会わないよう旅の安全を祈ったものと思われます。

6 打杭峠の五輪

阿木と岩村を結ぶ岩村街道の阿木と岩村町富田を分ける打杭峠に、直径10mほどの経塚と、その上に高さ2m弱の五輪の塔がたっています。一対あるうちの一つが阿木に位置します。

恵那市の調査報告では、岩村藩が17世紀末に、街道を通じてやってくる外敵や疫病などから城や城下を守るため造ったとみられ、峠には関所があったと記しています。

7 両伝寺検見坂入口

両伝寺から山野田へ通じる道で、山野田側が検見坂といわれます。検見は役人が稲の実り具合を見てその年の年貢を決めることです。

※年貢：昔の税金で、米・麦・大豆などをおさめた

8 若王子神社

承応２年（1653年）に建てられました。若王子神社に祀られている御祭神は不明です。境内に末社が10社もあり古い伝承があります。昔は八幡神社から若王子神社までみこしの渡御が行われていたようです。昭和47年八幡神社を建て直す時は御御霊をこの神社へ移して行われました。

土台が猫の足の形をした珍しい灯篭が立っています。

9 久須田薬師堂

薬師瑠璃光如来が祀ってあります。薬師如来はすべての病気を治すという仏様で、左手に薬つぼを持っています。

お薬師様をまつるのは病気が流行った可能性があります。

また、江戸時代には会合は禁止されていましたが、信仰なら許されたために集まる目的でこうしたものが作られました。

10 八屋砥弘法堂

いつの頃かここの尊像が盗まれたことがありました。ところが、山づたいにある洞の出口まで来たときどろぼうは、重さに耐えかねてここに置いていきました。村人がこれを探しだし、元のところに祀った。それからこの地を盗人洞と呼ぶようになったと伝えられています。

11 久須田遺跡

ほ場整備事業に伴い平成２年に発掘が行われ、縄文時代の住居址・土器・石器や弥生時代の土器などが出土しました。

出土品は縄文後期の土器類が大半を占めています。

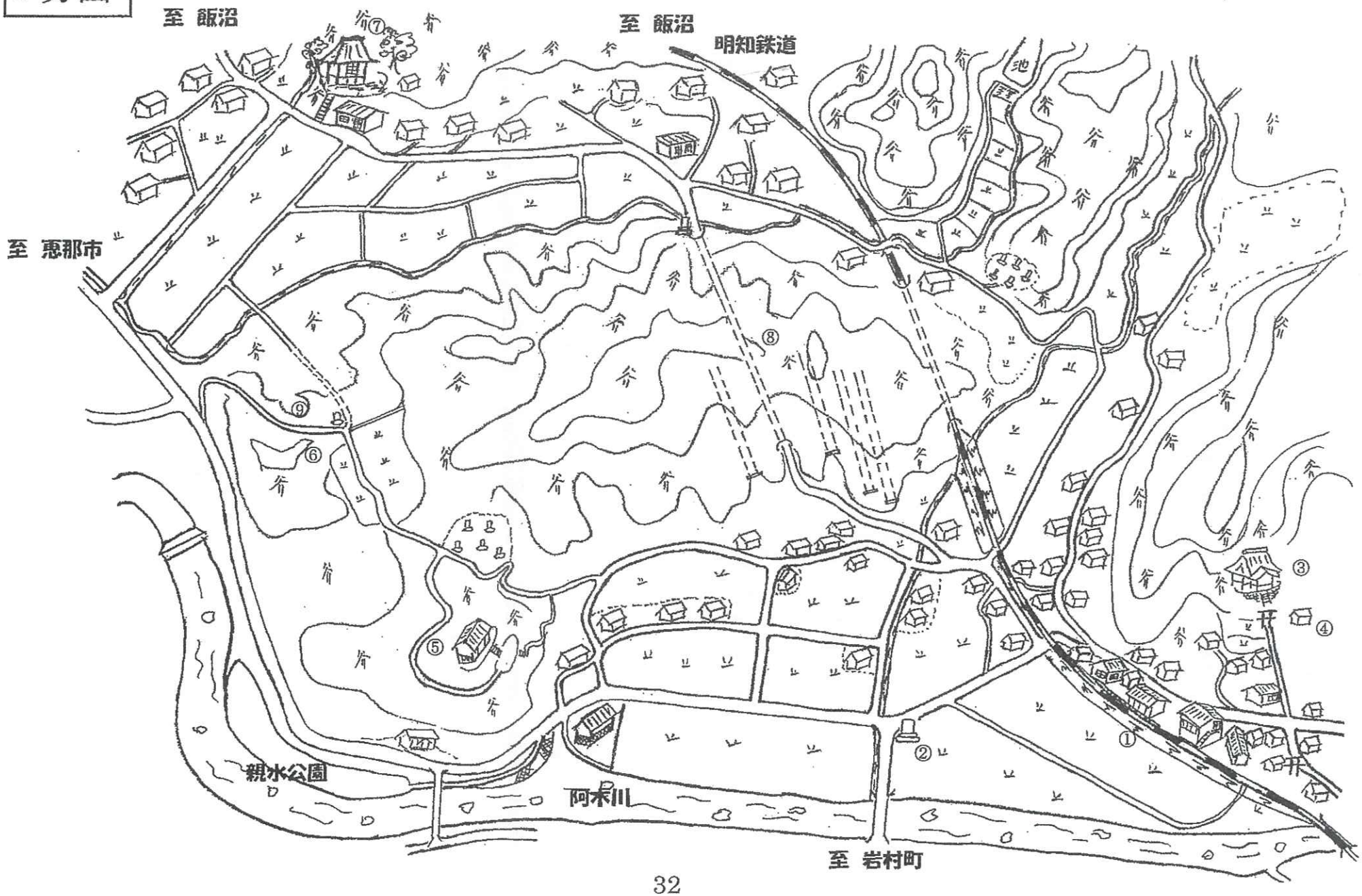
縄文土器の文様は関東系、関西系の両方の影響を受けており、この地方が東西文化の交流地点だったことを示しています。

12 土井神

土井は土を堤防のように積み上げた土のかこい（＝土塁）のことで、館や城を守る施設です。碑のある場所は久須田のあざ「堀田」と呼ばれる所です。

戦国時代のことと思われますが、阿木に堀田某（土肥守）という武将がいて「見沢殿」と呼ばれたと江戸時代の古文書に書かれていますが、その人を祀ったと考えられます。

5分団



【5分団】

1 明知鉄道阿木駅

国鉄明知線が昭和８年に大井から阿木まで開通しました。開通式では昼に花火をあげ、花火の中の落下傘をみんなで奪い合うなど賑わいました。小学生が全員参加して、お祝いの村芝居も 行 れました。

明知鉄道は昭和６０年に国鉄明知線を引き継いで、第三セクター方式の経営形態として発足し開業しました。

2 宮田整田碑

耕地整理の記念碑。

阿木地区では昭和 50年代に大型機械導入など農業の大規模化のため水田を整備し、水田の交換や灌漑（水を引くこと）などによって水田や畑を利用しやすくしました。

3 八幡神社

創建は1471年で、明治初期の一村一社制により、阿木地区のすべてを守る神社として、阿木中の人たちから大事にされてきました。

祭神は誉田別 命（応神天皇）です。

毎年11月 3日にお祭りが行われ、その年に多くのお米などが取れたことを感謝し、みんなの体が丈夫であるように、仕事がうまく行くようにお祈りします。

4 阿弥陀堂

鑑定によれば、御本尊は阿弥陀如来座像で 1100年ごろに奈良の地で造られた寄せ木細工と言われています。火事にあい、御本尊の顔が焼けています。

「安産の神」として近隣住民の信仰を受け、堂は平成初期に再建されました。

5 天神森

この森には、学問の祭神（菅原道真）を祀っている天神神社と、神明神社が同じ境内にあります。天神神社は1667年に創建されました。

近くの阿木川にはかつて天神淵があり、天神橋が今も架かっています。また、この森には天神古墳があります。

6 天神古墳

古墳（昔の人の墓）が２基あります。盗掘されてしまい、埋葬品などはなくなっています。

この近くに住んでいた人々を支配していた人のお墓です。ふもとに暮らす人々が見上げるところに作られました。

7 三嶋神社

寛文７年（1667年）１１月に建てられました。祭神は言代主神です。

末社には昭和６年５月に阿木の北山より移転され合祀された火産霊神が祀られています。

8 野田隧道（トンネル）

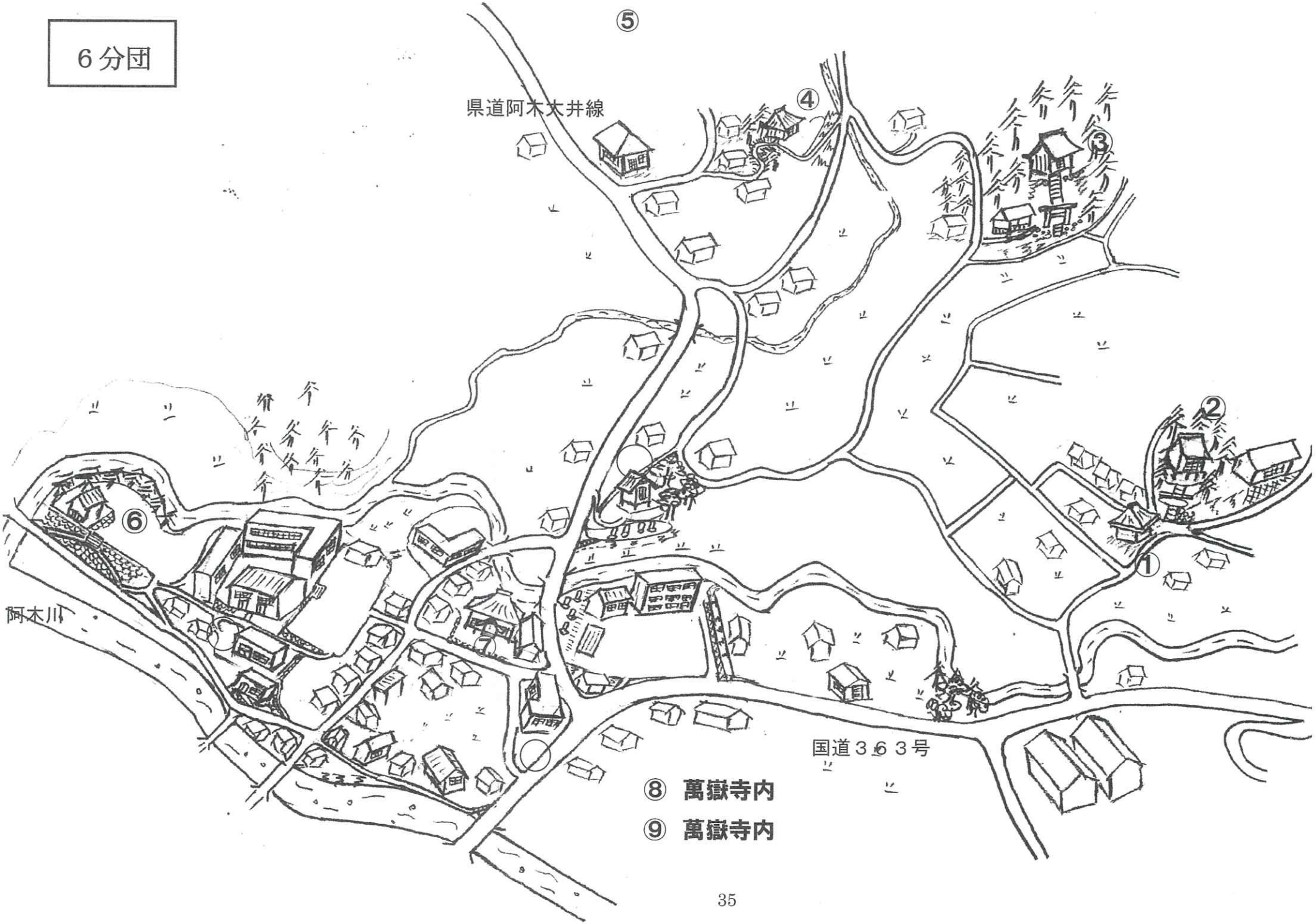
第２次世界大戦中に軍需工場を作るため、岩盤の厚い野田や久須田などに朝鮮の人々を連行してきて掘らせました。

戦後、亜炭を運ぶための近道として半田市の加藤銀三郎さんが私財を投じて開通させました。昭和４０年代に壁にコンクリートが吹き付けられ、野田地区の人々は駅などへ行くときに安全に通れるようになりました。

9 細野の石仏

お地蔵様です。一方は中津、一方は大井へ行く道しるべがあり、そのそばで旅人を見守っていました。

6分団



【6分団】

1 藤上弘法堂

大正8年藤上神社の大杉伐採に先立ち、現在地に移築されたと言われています。昭和58年12月に住民が中心となり茅葺屋根の葺き替えが行われました。弘法様、観音様（子授けの観音様と言われている）が祀られています。

2 藤上神社

寛永５年11月（1628年）創建。祭神は天御中主神（宇宙創成の根本をつくられた神様）です。境内神社二社には熊野神社（速玉男神）と白山神社（菊理比姫神）で、地域の名前のついた神社は珍しい。

神社前に夫婦杉があり、樹齢370年といわれていましたが、落雷にあい枯れてきたので大正9年に伐採されました。

3 熊野神社

慶安4年11月（1651年）創建。祭神は速玉男神です。境内神社は白山神社、白髭神社、稲荷神社、金刀比羅神社、熊野神社の四社です。

4 薬師堂

享保５年（1720年）本堂創建。薬師如来像が安置されています。文化11年（1814年）薬師堂を再建し、平成４年（1992年）本堂と南無東方薬師瑠璃光如来像を修復しました。

堂の周囲に四十八夜念仏供養石仏群があります。

5 野内秋葉三尺坊

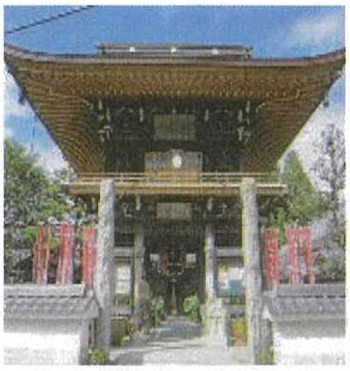
明治頃遠州（現在の静岡県）の秋葉山より迎えました。秋葉様は火除けの神様で、三尺（約１m）四方のお堂に祭られています。

阿木の各地に秋葉神社がありますが、それだけ火事を恐れていたことを示しています。

6 阿木護国神社

東京九段の靖国神社と同じで、旧阿木村出身の戦没者（西南の役以来）212柱の御霊が祀ってあります。

この神社は昭和49年に建立されたもので、それ以前は現橋場クラブに「記念碑」があり、出征兵をここから送りました。



7 賀雲山萬嶽寺（曹洞宗）

天和年間（1620年前後）観室察公和尚賀雲院開創。慶安3年（1650年）岩村盛厳寺六世在天三龍和尚が萬嶽寺と名付けました。龍泉寺にあったと伝えられる馬頭観世音菩薩像は県指定、本尊の聖観世音菩薩像は市指定の文化財です。

山門は230年前の建物で豊川閣は大正6年にご真像を安置し、鐘楼堂は昭和50年、位牌堂は平成元年に再建しました。

寺宝は大日如来像、延命地蔵尊座像、青面金剛童子、十六羅漢、愛染明王、木版大般若経六百巻、地獄極楽絵図などです。

8 馬頭観世音菩薩（萬嶽寺蔵）

室町時代の作で寄木造り、玉眼、三目三面八臂の坐像。根の上の天台宗龍泉寺の本尊と伝えられています。昭和42年岐阜県重要文化財に指定されました。

9 聖観世音菩薩（萬嶽寺蔵）

萬嶽寺の本尊で昭和59年中津川市文化財に指定されました。仏像の裏に「東濃恵奈郡 阿木村 萬嶽寺 大殿 本尊 慈覚大師作　聖観音像 壱尊　尾州国 春尼 寄附 の 者也 幻住澤堂叟安置之　慈時宝永元甲 申暦正月18日」とあります。

あ と が き

平成２８年９月に、阿木地域の各種団体から構成される阿木地域伝統文化継承事業実行員会が設立されました。

地域の「たから」である文化遺産を活用し、伝統文化、伝統芸能の公開など地域の活性化、観光振興に資する地域の実情に適した取組みの推進を目的として活動を行っています。

今回、文化庁の文化芸術振興費補助金をいただくことができ、阿木・飯沼地区の文化遺産、史跡をページの許すかぎり紹介するはこびとなりました。

本書を利用し、阿木・飯沼地区の歴史に興味をいだき、後世に伝えていくことができればと期待しております。

本書の執筆発行にあたり、髙田徹様、森井龍男様にそれぞれの分野で監修をいただくとともに、多くの方々にご協力をいただき深くお礼申し上げます。

末筆となりましたが以下に参加、原稿を起草されました方々の名前を記し、ご協力、ご指導をいただいたことに感謝申し上げます。

【あいうえお順】

秋山真一　安藤隆示　伊藤三枝　片桐光朗
皮地等司　櫻井尭剛　佐々木武　杉浦正和
鈴木露子　中神啓克　戸塚智尚　西尾義久
本多敬穂　渡邉和義

【事務局】

阿木地域伝統文化継承事業実行員会
阿木公民館

安　岐　の　文　化　遺　産

平成 29 年 12 月　8日印刷
平成 29 年 12 月 15 日発行
編集・発行　阿木地域伝統文化継承事業実行員会
岐阜県中津川市阿木 33 番地　阿木公民館内
電話　0573-63-2001　FAX　0573-73-0001
印刷・製本　株式会社　協和印刷工業
中津川市中津川 2190-1
電話　0573-66-3788　FAX　0573-66-7035

この冊子は文化庁平成29年度文化遺産総合活用推進事業（文化芸術振興費補助金）を利用して作成されたものである。

文化庁